



©Yuki Asada

“アテ”の温かさを糸に込めて

クロスステッチで描かれたネコやバナナ。どこか優しさを感じる刺しゅうがあらわれた商品は、フィリピンのルソン島の女性たちが一つ一つ手作りしています。彼女たちにとって、クロスステッチは学校や家庭で習うなじみ深いもの。その特技を生かして生計向上につなげようと、住居問題に取り組む国際NGO「Habitat for Humanity」の明治学院大学支部「ハビタットMGU」が“Philippines Partnership Project”をスタートさせました。日本の学生たちとフィリピンの女性たちがアイデアを出し合ってクロスステッチのデザインを固め、試作を重ねて製作した商品を日本で販売しています。

製作メンバーの女性たちは30代から60代までと幅広く、学生たちからフィリピン

の言葉でお姉さんを意味する“アテ”と呼ばれています。現地では、議論が煮詰まったときに食事を作って気分転換を促してくれたり、学生たちはアテの懐の深さに支えられたことも多いそうです。ハビタットMGUの高野来^{らい}さんは、「製作メンバーを増やそうと企画したクロスステッチ体験イベントがうまく進まずに途方にくれていると、アテたちから当初対象にしていなかった子どもを呼んでどうかと提案がありました。そこで、多くの人が集まる教会での日曜礼拝後の開催として参加者を募ったところ、無事に成功。協力すればもっと良いものを作れると学びました」と話します。

プロジェクト開始から約8年。今後はアテたち自身が現地で販売を目指していきます。



多くの参加者でにぎわったクロスステッチ体験イベント

- ★ フィリピンの刺しゅう製品を7人にプレゼント！
→ 詳細は38ページへ
- ★ 商品はフリーマーケットや明治学院大学の学園祭、文具店「鎌倉コトリ」などで購入できます。

フィリピン
マニラ

